神奈川県立柏陽高等学校における学校運営協議会 開催結果

本校の学校運営協議会を次のとおりに開催した。

審議会等名称	神奈川県立柏陽高等学校　令和４年度　第２回学校運営協議会
開催日時	令和５年３月 11 日（土）　14：30～16：30
開催場所	神奈川県立柏陽高等学校　大教室
［役職名］ 出席者	［委員］赤羽　三枝　（会長、元県立高等学校長） 小山内　いづ美（横浜市立大学理事長） 冨士田　学　（横浜市栄区長） 飯島　俊朗　（横浜市消防局栄消防署長） 湊　浩一　（横浜市立本郷中学校長） 原　南実子　（横浜市立本郷台小学校長） 細田　利明　（本郷中央連合町内会自治会長） 丸山　厚　（東京工業大学教授、本校卒業生） 田中　均　（柏樹会会長） 井坂　秀一　（柏陽高等学校長） ［事務局］岩崎　幸代（副校長）、竹村　健二（教頭）、飯塚　洋史（事務長）、 東條　薫（総括教諭）、川上　晃宏（総括教諭）、千葉　健史（総括教諭）、 三角　峻（教諭）、近江　一太（教諭）、中山　藍（教諭）、 須賀　脩太郎（教諭）、辻角　桃子（教諭）、鷲野　真也（教諭）

～ 開　会 ～

１　校長あいさつ

＜井坂校長＞

・ 本学校運営協議会の開催については、ここのところコロナで苦労している。令和元年度までは文化祭時にも開催し、実際の文化祭の様子も見ていただいていたが、コロナウイルスの影響で現在は全くできていない。せっかく皆さまとお近づきになれたのにここ２、３年はなかなか開催できずにいたが、本日は何とか開催できてよかった。

・ 本日は２回目といいながら、１回目は書面開催となったため、集まって実施するのは初めてになるが、改めて本校のことをご理解いただき、ご感想やご意見を頂戴して、来年以降の学校運営に反映させていきたい。

２　報告

＜報告１＞　柏陽高校の概要

＜井坂校長＞

・ 配付資料の「リーフレット 県立高校が変わります」、「柏陽高校の学校目標・学校評価等」、「学校案内」の３点を用いて説明する。

・ 神奈川県の県立高校改革は１期を 10 年にわたって計画しているが、その３期目が令和４年 12 月に発表となった。県立高校でそれぞれ特色を出そうということで、横浜翠嵐、川和、柏陽、湘南、厚木の５校が学力向上進学重点校として県教委から指定されており、それをベースに学校運営している。

・ 「柏陽高等学校のミッション」として、設置者である県教委が定めたものについて説明する。生徒一人ひとりの学力の育成等を目差した教育課程の適切な編成をすること、「国際社会で貢献できる人材の育成をめざし、（中略）、生徒の探究力、論理的思考力、表現力などの資質・能力を育む」こととあるように、このようなことが本校のミッションであると設置者が定めている。

・ このミッションを踏まえて「スクール・ポリシー」では、本校が具体的に何をするのかを示している。「１　グラデュエーション・ポリシー」では育成を目指す資質・能力として、探究する態度や創造する力を身に付けることを定めている。「２　カリキュラム・ポリシー」では教育課程の編成として、「授業の柏陽」のスローガンのもと、すべての教科・科目において授業を大切にし、きめ細かな学習支援を行うこと、国公立大学受験に十分対応し得る教育課程のもとに学ぶことを示している。「３　アドミッション・ポリシー」ではどのような入学者を受入れていきたいかを示しており、本校の校風や伝統、教育目標を理解し、新た

な価値を創造しようと努力する生徒、難関国公立大学への進学など高い目標を持つ生徒、多様な考え方を受け入れ、主体的に考え、協働して物事に取り組むことのできる生徒をあげている。

- 本校のグランドデザインでは、「次代を担う人材の育成」ということで、具体的には、「授業の柏陽」、系統的進路指導、充実した学校生活の三本柱を掲げている。
- 学校組織については、校長以下教諭がいてこの学校運営協議会も組織のうちに位置している。日々の学校運営では教頭の下に６つのグループがあり、それぞれの業務内容について後ほど説明する。職員として部活動インストラクター等も含めると、総勢約 100 人で学校運営をしている。
- 校内に教育課程改善推進会議をつくり、力を入れている。現在の１学年から新しいカリキュラムになり教育課程の改善に向けて常に動いているが、実力アップ講座、ICT 利活用、探究活動については推進チームをつくり会議を重ねている。
- 特色ある教育活動として、総合的な探究の時間、キャリアアップ講座（授業とは関係なく、土日や長期休み等に大学や研究機関と連携して行う。希望者対象）、実力アップ講座（土曜・長期休みに行う補習・補講）、グローバル教育がある。

＜報告２＞　柏陽高校の教育活動について

グループ	説明者	概要
教務・学習	川上 総括教諭	・「授業の柏陽」というスローガンを掲げており、授業改善に取り組んでいる。 ・新しい時代に対応した教育課程に対応している途中で、本年度の取組みの反省点を踏まえ、来年度はどのようにするか、継続的な授業改善に取り組んでいる。
進路指導	千葉 総括教諭	・進路指導における取組結果として、この春卒業した 54 期の進路実績について、別紙の合格者数一覧に記載した。 ・国立大学には 101 名（３月 11 日現在）が合格し、中でも東京工業大学には８名が現役合格した。 ・公立大学には 11 名が合格し、横浜市立大学の医学部にも推薦で合格した生徒もいる。 ・国公立大学前期合格者は計 112 名（３月 11 日現在）で、昨年度 105 名の合格者からやや増加した。 ・本年度の取組みとしては、毎年行っている保護者対象進路説明会を学年ごとに一括で行うことができた。３学年の出願指導検討会では、３学年の担任・副担任と進路指導グループ全員が検討を重ねた。このように、学校全体で進路指導を行っている。
生活支援	三角 教諭	・生徒が安心・安全な学校生活を送ることができるように、日々取り組んでいる。 ・スクールカウンセラーによるカウンセリングの需要が多く、毎回すべての相談枠が埋まっている状況にある。生徒が相談しやすい環境がつくれるよう、担任をはじめとして全職員で日頃から丁寧な声掛けを心掛けている。 ・学校生活についてのアンケートでは、学校生活を楽しいと感じている生徒が 90%を超えているという結果が得られた。一方、多くの生徒が将来の進路や勉強を悩みとしてあげており、丁寧なケアを必要としている。 ・悩みを抱えている生徒に対しては、各担任が迅速にヒヤリングを行い、学年全体で情報を共有して対応している。 ・今後も外部機関との連携を綿密に行い、一人ひとりの生徒が充実した学校生活を送ることができるように取り組んでいく。
総務・管理	東條 総括教諭	・環境衛生関係としては「月例清掃」を行い、毎月清掃活動の時間を確保し全校で掃除に取り組んでいる。感染症対策としては、現在は生徒が自分で自分の机を消毒する等の形になっている。 ・防災訓練について、年３回行っているが、毎年消防署に協力いただいて体験活動を行っている第２回は雨天につき中止となった。 ・PTA との連携については、本年度ようやく保護者に生徒の様子を見ていただける機会をつくれたが、感染症対策の面で協力いただいた。 ・同窓会の柏樹会からは、軽音楽部、囲碁将棋部の全国大会出場に伴い、援助をいただいている。
研究・広報		・感染症対策をした上で、学校説明会の充実を図ってきた。 ・HP の充実について、様々な情報を、保護者、校外の方、地域の方に見ていただけるためにも、即時の配信となるよう工夫を重ねており、仕組みづくりができてきた。 ・新教育課程の総合的な探究の時間とグローバル教育の取組みについては、後ほど担当者から説明する。

	活動支援	東條 総括教諭	・ ここ２、３年は行事を実施できても、保護者の方に生徒の活動の様子を見ていただくことができなかったが、６月の体育祭についてはPTAの協力もあり、３年生の保護者の方に限定して見ていただけた。 ・ ９月の文化祭については、全学年の保護者の方に来ていただくことができた。昨年度は実施できなかった食販については、感染リスクの低いものに限定して実施でき、２日間開催することができた。 ・ 部活動については、囲碁将棋部、軽音楽部、英語部が全国大会、競技かるた部、陸上競技部が関東大会に出場した。 ・ 栄区と本校との協働について紹介する。救急法講習会では例年、AEDの講習を消防署の職員の方に来ていただき行っている。本年度は栄区から「児童生徒スポーツ・文化活動表彰」で英語部と囲碁将棋部の生徒が区長から表彰していただいた。１月に実施された「栄区民ロードレース大会」では、生徒12名が大会運営に協力し、10名が競技に参加した。３月12日に行われる本郷台駅前のイベント「本郷台ダンス＆ミュージックフェス」では、軽音楽部とダンス部が参加し、「いたち川桜ライトアップ」という行事では、美術部が参加する予定となっている。 ・ 昨年度に比べ実施できることが増えており、来年度以降、より緩和されればより多くのことを地元と協働したいと思っている。

＜報告３＞　【具体の取組み】総合的な探究の時間、グローバル教育

総合的な探究の時間

＜近江教諭＞

・ 本校の総合的な探究の時間の枠組みについて簡単に説明させていただく。
・ 旧課程では、１年と３年に設置していた総合的な探究の時間を、新課程ではその内容を発展的に再構築し、１年と２年に設置している。２年次の科学と文化Ⅱにおける実践的な探究活動を見据え、１年次の科学と文化Ⅰにおいて基礎的な資質・能力を育成する、といった２年間一貫した体系的な探究プログラムとなっている。
・ 科学と文化Ⅰでは、探究活動の基礎となる４つの研修を進め、科学と文化Ⅱにおける実践的な探究活動につなげていく。本校オリジナルテキストを用いて組織的に進めており、来年度は本年度の反省も活かしながら、「教員向けマニュアル」も作成し、より充実した活動となるよう工夫を施していく。
・ 本年度の探究活動の様子を紹介する。４月、「何のために探究をするのか」という講演から、科学と文化Ⅰがスタートした。
・ 情報リテラシー研修では、共通のテーマでディベートを行った。チームの仲間と協働し、約１か月の準備を行い、このディベートを迎えた。
・ データ分析研修では、オープンデータを解析した。データ分析研修のための本校オリジナルサイトも作成し、活動を進めた。
・ 令和５年度に向け、令和４年度の反省をしっかり活かし、より良いプログラムとなるよう準備を進めていく。本年度は新しいものを作りながら運営する必要があったため分冊となっていたオリジナルテキストは、次年度は１冊にまとめるとともに内容のさらなる充実を図る。
・ 次年度新たにスタートする科学と文化Ⅱについても、生徒が主体性を存分に発揮して探究活動に取り組める環境を整えていきたい。次年度は、旧課程と新課程が共存することもあり、ほぼ全職員が探究を担当する見込みであり、情報交換を密にし、組織的な授業改善を繰り返しながら、より良い探究の実現を目指す。

グローバル教育

＜中山教諭＞

・ 本校ではグローバル教育に力を入れており、県立高校の普通科としては先進的な取り組みをしていると自負している。
・ 生徒全員が対象の取組みとして、ディベート大会（Fun Fun Debate Competition)、修学旅行での台湾の三重高校との交流、米国メモリアル高校との交流（来年度６月来校予定）があげられる。
・ 希望者向けの研修としては、本校独自の研修であるエンパワーメントプログラム、海外大学等交流研修を行っており、このほかに、進学重点校や首都圏の進学校と共同で行う研修もある。
・ ディベート大会（Fun Fun Debate Competition）：
授業で行うディベート活動の集大成として、毎年３月にクラス対抗で実施している。学年末テスト明けに２回予選ラウンドを行い、暫定順位を決定した後、ディベート大会の本戦で最終順位を決定する。生徒の

論理的思考力、表現力、判断力を身に着けることを目的とし、生徒が興味関心をもてるように論題を決めている。昨年度の様子を紹介する。即興ディベートであるためその場で反論しなければならないが、自信をもって意見を述べている。

・ エンパワーメントプログラム：
本年度は７月末に実施した。各グループにリーダーとして留学生がつき、５日間に渡り All English でディスカッションやディベートを行う。本年度はコロナウイルスの濃厚接触者となってしまった生徒がいたが、オンラインで受講した生徒もいた。このプログラムでは、英語で話すことだけではなく、「エンパワーメント」が主題となっており、活動を通して，自分と向き合い，自分の中にある殻を割って成長することが目的となっている。活動を通して自信を付け、人が変わったように成長する生徒もいる。

・ ウクライナ募金：
国際委員会の生徒が主導で校内で実施した。委員会の生徒が自分たちでウクライナの事について調べ、自分の学年の生徒たちに状況を説明して募金への協力を呼び掛けた。

・ 首都圏公立進学校校長会主催リーダー研修：
日比谷、浦和、浦和第一女子、千葉、船橋、湘南、柏陽から希望の生徒が集まり、本年度は国内で開催された。オンラインで、現地で活躍する様々な分野のゲストスピーカーを招いての講演を聞き、スタンフォード大学でも開催されている Dr. Shigematsu 教授の“Mindfulness”クラスを受講した。日本人同士であっても、英語でコミュニケーションをとりながら、協力する活動も行った。

・ 海外大学等交流研修：
例年 UCLA 研修として UCLA 大学で実施してきたが、燃油サーチャージの高騰などの情勢を受けて、費用対効果などを考慮した上で、来年度はシンガポール国立大学での実施を計画している。アメリカに比べて渡航費を安く抑えつつ、アジアの勢いのある雰囲気を感じられるため、生徒にとっては有意義な研修となると考えている。

＜井坂校長＞

・ コロナの流行前に実施した海外大学等交流研修では、参加募集人数を大幅に超える 70 人の希望者が出て、最終的には抽選となるほどであった。来年度もきっとたくさんの生徒が参加してくれるだろうと期待している。

３　協議

＜赤羽委員＞

次に協議事項に入る。説明をお願いする。

＜井坂校長＞

配付資料の「リーフレット 県立高校が変わります」、「柏陽高校の学校目標・学校評価等」、「学校案内」の３点を用いて説明する。

「学校目標・学校評価」の冊子をご用意いただきたい。まず、最後のページ、先日卒業して行った本校 54 期生の生徒とその保護者を対象とした、アンケートの結果について報告する。

生徒向けアンケートにおいて、項目「A-1：高校生活を振り返ってみて、あなたが通っている高校に満足していますか。」については、肯定意見が 89％であった。また、項目「A-3：『学校での授業や活動が今後の自分のために役立つ』と思いますか。」は、肯定意見が 92％であり、項目「B-7：修学旅行や文化祭、体育祭など、学校行事や生徒会活動で充実した活動ができた。」は、肯定意見が 95％に上った。54 期生は最もコロナの影響を受けた学年にもかかわらず、このような結果になったことはありがたい限りである。３年間学校行事をすべて行うことができたことがこの結果につながったのではないかと思う。その反面、項目「B-12：地域の方々との清掃活動や近隣の学校などとの交流活動、ボランティア活動などにより、社会貢献の大切さを考えることができた。」については、肯定意見が 40％に留まった。コロナ禍以前は、地域貢献活動として、学年ごとに本郷台駅前の清掃活動等を行っていたが、ここ３年間は実施できなかった。

保護者向けアンケートにおいて、項目「A-1：生徒本人の高校生活を振り返って、本人が通っている高校に満足していますか。」は、肯定意見が 85％であった。項目「A-6：高校から保護者に対して積極的に情報が提供され、学校の様子がわかったと思いますか。」は、肯定意見 57％であった。学校 HP については高い評価をいただいている一方、学校に直接来ていただく機会がほとんどなかったので、なかなか伝わらなかったのではと感じている。

では、引き続き、学校評価報告書実施結果について、ご説明する。学校評価については、県教委から、視点１の教育課程・学習指導から、視点５までが指定されている。この後、皆さまから意見をいただき、「学校関係者評価」の欄にまとめさせていただき、後日、学校として、総合評価をしたいと思っている。

＜令和４年度学校評価報告書（実施結果）＞

＜井坂校長＞

（教育課程・学習指導）

「基礎学力の定着、課題発見解決力の育成を目指した教育課程編成及び授業改善に取り組む。」について

今年度の「取組の内容」として、実力アップ講座をより組織的に取り組むこと、ICT 利活用推進チームを新設し、組織的に授業改善に取り組むことを掲げた。そして、「校内評価」であるが、年間計画を作成して組織的に取り組むことができ、以前からの第１期・第２期に加え、第３期を設定し、土曜講習を積極的に実施した結果、１年生の受講人数が大幅に増加した。しかし、ICT の利活用については、１年生の肯定評価が 58%に留まり、唯一、目標を達成することができなかった。その一因として、半導体不足などの影響により、個人 PC の準備が４月当初に間に合わなかったことなどが挙げられる。ただ、授業での活用や、活用方法の指導などの更なる利活用を考えていく必要は感じている。

「学校行事や生徒会活動における生徒の主体的な取組みを推進する。」について

学校評価アンケートの学校行事・部活動等において「主体的に取り組むことができたか」等の項目について、肯定評価 93%を達成した。様々な行事のなかで、コロナ禍においても生徒たちが実行委員を中心に、工夫しながら精力的に活動してくれた。

（生徒指導・支援）

「学校行事や部活動の活性化を通し、責任感や連帯感の涵養を図る。」について

コロナ禍においても工夫した教育活動に取り組み、学校評価アンケートの取組状況や満足度等について、行事 95%、部活動 91%が満足しているとの回答であった。一方、学習との両立に苦慮している生徒がいることなどの課題がある。その支援に努め続けたい。

「生徒一人ひとりの個に応じた支援体制の充実を図り、心身の成長を支援する。」について

スクールカウンセラーによる教育相談は 19 回実施し、延べ 70 人が利用した。校内における教育相談の実施状況や学校評価アンケートの教育相談等に関する項目について、肯定意見は 84%に上ったが、ここは 100%を目指していきたい。

（進路指導・支援）

「生徒の高い進路希望の実現を目指すため、進路指導の充実を図る。」について

「生徒及び保護者の面談、出願指導検討会及び進路説明会が有効であったか。大学入学共通テスト得点状況、難関大学合格者数 10 名以上、国公立大学合格率 40%以上を達成できたか」を評価の観点として設定していた。結果として進路指導への肯定評価は 74%であった。現時点で、今年度の国公立大学の前期試験合格者数が 112 名おり、昨年度を上回っている。なお、出願指導検討会というのは、ここ数年で取り組んでいるもので、12 月に３年生すべての生徒に対して面談を行い、「どの生徒が、どの大学、どの学部を受験するか」を教員が把握して指導している。それも含めて日常的にきめ細かい指導をしている。柏陽高校の特徴として、現役進学率が約 80%と高い数字を残しており、現役で国公立大学に合格するための指導をしている。

（地域等との協働）

「ホームページのコンテンツを充実させ、学校の特色と魅力を積極的に発信する。」について

学校 HP の肯定評価が 92%であった一方、保護者の「学校の様子がよく分かった」という評価は 57%に留まった。電子媒体を用いるなど工夫してはいるが、やはり、実際に来ていただくことが一番であると感じている。

「保護者や地域、大学等外部機関、行政機関等との協働連携を促進し、本校教育力の向上を図る。」について

キャリアアップ講座は 18 講座を設定し、昨年度よりは増えたものの、コロナ禍以前の数字には及ばなかった。オンライン講座の設定など工夫しつつ、講座数や内容の充実を図っていく。

（学校管理・学校運営）

「教育環境の変化に迅速に対応し、前向きに課題に取り組む雰囲気を醸成し、魅力と活気ある学校づくりに取り組む。」について

定例の事故防止会議に加え、「LGBTs」に係る職員人権研修会を実施した。

「各種会議を計画的に実施し、効率的な学校運営に取り組むとともに、緊張感のある防災訓練を継続し、安全安心な教育環境を整備する。」について

電子掲示板を利用するなど、職員間の連絡を効率的に行うことができている。

説明は以上である。是非、意見をいただきたい。

＜赤羽委員＞

では、「学校評価」について、委員の皆さまから忌憚のない意見をいただきたい。

＜田中委員＞

守備範囲が広いなという印象を受けた。

- Fun Fun Debate Competition (FDC) について、生徒全員が取り組むことはすごいと感じた。経年的かつ組織的に続いていくことを考えると、今後も柏陽高校が発展していくと思われた。シンガポール国立大学やエンパワーメントプログラムなど、教員の熱意と工夫改善がなければ到底実現できないものなので、今後も是非頑張っていただきたい。
- 今度の学習指導要領で「主体的、対話的で深い学びの実現」が謳われていて、そこに向けた授業改善が求められるが、柏陽高校の英語科は実現できていると感じた。一方、ほかの教科の様子はいかがか。
- 「総合的な探究の時間」も素晴らしいと感じた。課題設定・情報収集などのサイクルをどう回すか、どう指導するのか、苦労する点でもある。そのなかで、ルーブリック評価を用いることはどうであろうか。実験ノートなどもあるとさらによくなるはずである。
- また、これだけ、グローバル教育の実践ができているので、毎年実施している GTEC の点数の向上も見込めるのではないか。経年変化の特徴があれば教えていただきたい。
- ICT の利活用について、県立高校の Wi-Fi 状況が十分でないなかで、柏陽高校の工夫があれば聞きたい。

＜赤羽委員＞

まず、英語科以外の取り組みはいかがか。

＜三角教諭＞

- 保健の授業では、１学年はグループ学習を行っており、小単元ごとにグループを設定して、生徒が調べ学習、プレゼンテーションソフトを用いての準備、発表を行っている。１グループごと８分の発表を、クラス内 10 班あるので、３コマ分を充てて行っている。また、２学年はディベート学習と発表を行うので、年間の８割程度、ICT を用いた授業を行っている。

＜赤羽委員＞

ルーブリック評価や実験ノートの活用についてはいかがか。

＜近江教諭＞

- 総合的な探究の時間について、学習指導要領では目標と内容は各学校で定めることとなっている。目標と育成したい資質・能力から逆算し、１年次「科学と文化Ⅰ」での４つの研修にかかわる観点については、１枚のペーパーにまとめている。生徒に対しては、テキストの中で単元ごとに自己評価というかたちで ABCD で振り返りを行わせている。次年度以降の課題として、ルーブリック評価の導入を考えたい。

＜赤羽委員＞

GTEC の得点向上についてはいかがか。

＜中山教諭＞

- 全学年で受験しているが、学力向上進学重点校の最終到達目標として、卒業までに CEFR B２以上を 70%以上の生徒が達成していることが挙げられている。柏陽高校は安定してこの数値を超えているので、順調に結果が出ていると言える。

＜赤羽委員＞

ICT 利活用の実態はいかがか。

＜東條総括教諭＞

- １学年は、１人１台 PC が始まったが、個人 PC が揃わないうちは、学校に配備されているクロームブックを活用した。ただ、Wi-Fi の校内環境が十分でないため、同時に 40 人をつなぐことは難しい。そのなかでも、化学の授業を例に挙げると、演示実験の際、生徒各自の端末で、教員の手元の作業が見えるように１対 40 という配信形式をとることはできる。さらに、全教科科目で classroom を用いて、授業の連絡、課題の共有など利活用はできている。

＜丸山委員＞

・ ディベートの事例は感心した。コロナ禍において、大学の研究室で、オンラインでのディベートの難しさを感じることがあった。互いの理解度、本気度が伝わりづらかった。ディベートは論理的表現力が鍛えられるが、大学で日本語を書かせても論理性がない学生が意外と多い。英語でのディベートを取り入れていることで、国語科やほかの場面で変化があったりするのか聞きたい。

＜中山教諭＞

・ 普段の英語科の授業では、英語の論理構成と日本語の論理構成は異なるので、そこを意識するように指導している。

＜近江教諭＞

・ 探究の時間との往還ができている。数値は見えないものの、相乗効果はあると肌感覚で感じている。

＜井坂校長＞

・ 本校の生徒は真面目でいい子が多い。だが、一方で押し出しが弱い部分もある。海外研修等を経験するなかで、自分の意見をしっかり言える子になっていく姿を見てきた。もちろん普段の授業も一方的なものではない。学校行事も実行委員を中心とした運営を行っており、そのような気質を育成する場でもある。

＜小山内委員＞

・ さすが学力向上進学重点校であると感心した。グローバル教育について、横浜市立大学理学部では、2023 年度入試より２次試験の受験科目として英語が追加されたが、研究者になる上では英語で論文を書くことも必要であるので、非常に重要であると考えている。また、学生を見ていると、国語力・表現力をさらに磨いてほしいと思う場面がある。研究者の育成について、横浜市立大学は理化学研究所と連携して成果を上げている。理学部の女子学生も半数を占めており、意外と多い。「リケジョ」を増やそうとする文部科学省の政策にも横浜市立大学は手を挙げており、県教委も後援してくれているので、機会があれば連携させていただきたい。

＜湊委員＞

・ 柏陽高校は一番成功している学校の一つだと思う。地の利のよさも含め、様々な魅力があるし、生徒の満足度も高いのはすごいと感じている。大学進学を目的に来ている生徒が多いなかで、結果も出ているところが良い循環となっている。また、柏陽高校が生徒の学習をしっかり支えているということがアンケートの結果から見えてきた。「授業の本郷」と書きたいくらいである。

＜井坂校長＞

「本郷台小だより」を配付したので見ていただきたい。柏陽高校の探究活動と関わる部分もあると思う。

＜原委員＞

・ 「本郷台小だより」には、児童たちが１年間どう学んだかを３月号として記したが、小学校でも総合的な学習の時間がある。そのなかで実施した「科学の力はすごいぞイベント」について書いたが、子どもの言葉はすごく簡単な言葉しかない。例えば、「大人は子どもみたいに楽しんでくれないかなと心配していたけど、大人も心から楽しめることがあるってわかりました。子どもも大人も同じ楽しみを味わうことができるんだと思いました。」と、難しい言葉はない。児童からこの言葉が出てきた背景には、探究的に人と関わり、試行錯誤しながら、イベントを成功させた想いがあった。また、周囲の方に「楽しかったよ」と言ってもらえて実感ができたところから出てきたと思う。日本の教育や、人づくりを考えたとき、「探究する力」「人とかかわる力」「前向きに取り組もうとする力」を小さい頃から育てていかなければと感じている。柏陽高校の教育課程は豊かで、自分で選択できる点は魅力的である。「自分で選択する力」と、「意志を持ちながら自分の勉強に向き合う」ことが大事である。これは進路の選択や将来の仕事にも大きくつながるはずである。総合的な探究の時間は、小学校・中学校の取り組みを踏まえながら、高校でも充実させていってほしい。「どう探究するか」も大事ではあるが、「何を探究していくか」や、アドミッションポリシー「新たな価値を創造する」を目指すと、より深まる時間になるはずである。今、本郷台小学校の職員室に柏陽高校 OB が作った映画の宣伝ポスターが貼ってあり、そのように社会に一歩踏み出していく生徒が多い学校だと思うので、未来を願っている。

＜赤羽委員＞

地域との協働という視点ではいかがか。

＜冨士田委員＞

・ 校長自身が誇れる高校と思っていることが、すべてを語っている。多くの国公立大学現役合格を実現していることもあるし、「なりたい自分になれる高校が柏陽高校」と感じている。先生方も自信のある方が揃っているし、結果は数字として出るものであるが、栄区の誇りであることは間違いないと思っている。

＜飯島委員＞

・ 地域貢献という点では、柏陽高校の生徒は学習をしっかりと行ってきて、高い知識を身につけているので、例えば本郷中学校に行って、中学生に勉強を教える機会などあれば、柏陽生にとって復習にもなるし、地域貢献にもなると思う。柏陽高校のよさが地域にさらに伝わるはずである。また、進学実績を見ると工業系はより伸びていくと感じた。数学は積み上げ学習であるので、数学を補完するという視点でも有効なのではと思われた。ICT の利活用については、Kindle を用いることも面白いのではないか。さらに、悩みがあるが言い出せない生徒をいかに救うかという視点で言えば、スクールカウンセラーの利用についても ICT の利用を考えてみるといいのではと感じた。

＜細田委員＞

・ 住民の方が、柏陽高校に子どもを通わせたいという流れがもっとできれば、「地域のなかに柏陽あり」という意識が芽生えてくる。以前、授業見学をさせていただいた際、和気あいあいと楽しくやっており、楽しみながら取り組む姿勢に驚いたことを覚えている。柏陽高校の生徒は朗らかで、マナーも良く、地域の模範となる活動をしていると感じている。

＜赤羽委員＞

・ 地域との協働というと、清掃活動をイメージしがちだが、ロードレース、大学との連携、外部講師による講座など、コロナ禍においても様々な形で連携は続いている。

・ 柏陽高校でも、ウクライナへの募金活動を実施していた。「地域」と聞くと、目の前のことを私たちは思い起こすが、もしかすると、ウクライナも少し先の「地域」という時代に私たちは生きているのかもしれない。SNS などで様々な人・地域とつながることができる時代であり、「地域」の距離感が変わってきている。探究学習のなかにおいても、「他者を想うこと」、「他者への働きかけ・つながり」を意識されていくことを期待している。

以上の意見等を踏まえ、「学校関係者評価」に記載いただければと存じる。

4　懇談等

＜赤羽委員＞

では、ここからは、柏陽高校の現状や今後期待することなど、限られた時間ではあるが、特に話題は定めないので、懇談の時間として、自由にご発言いただければと存じる。

＜細田委員＞

・ 東大でも取り組んでいるジェンダーの問題で、とにかく女子の学生を増やしていかなければならない状況の中、高校側でリケジョを増やしていくような取り組みは何かあるか。

＜千葉教諭＞

・ 学校としてもアピールはしており、東工大 in 柏陽には女子も多数参加している。数学への苦手意識を持っている生徒は女子の方が多く、最終的に進路として理系を選択しないというケースがみられるので、今後も冊子を作るなど理系女子を増やしていくような土台を作り、さらなる呼びかけをしていきたい。

＜丸山委員＞

・ 実際に理数系を教える女性の教員はどれくらいか。

＜千葉教諭＞

・ 数学科は 11 人中１名。理科は８人中１名。

＜丸山委員＞

・ まず教員から女性を増やしていくのもよいのではないかと思う。

＜井坂校長＞

・ 実際の学校現場に女性が少ないのは現在の社会の実態でもあるので、変えていかなければならない点である。東大 in 柏陽や東工大 in 柏陽などで理系女子のための講義をしてもらうのもよいかもしれない。

＜原委員＞

・ 小学校教員は女性が多いが、中学校は男性教員が多い。（この男性の方が現場に多いことは）日本社会全体の問題かと。女性や子どもを持つ親の働き方が制度によってきちんと保障されるべきで、より安心して働ける社会の仕組みを「考える」人材を育て、日本の小学校や中学校、とりわけ柏陽の生徒たちがそのような働き方を社会において主張できるような、そのような人材を育てる教育をぜひ行っていただきたい。

＜湊委員＞

・ 県内に学区があったころは柏陽高校を目指す女子中学生はかなりいたと思う。最終的には生徒たちが自己実現を目指すことができる進路選択をさせることが一番かと。

5　事務局から

＜井坂校長＞

日頃から柏陽高校を温かいまなざしで見守りまた支援していただき、誠にありがとうございます。小学校・中学校から大学までの「縦」の関係と、地域という「横」の関係の中、「縦」「横」が交わるところで学校を運営できていることを改めて感じた。

私が柏陽に赴任の当時は、新型コロナウイルスではなくノロウイルスが流行しており、平成 28 年の秋に学校を３日間閉鎖したことがあった。その際に栄区のみなさんのご協力のもと、感染症の講義をしていただき、防護服を着て校内やスリッパの消毒などのご指導をいただいた。2019 年の台風 15 号の際には、当時の栄消防署長に来ていただき、校舎の１階にあった発電機や防災グッズなどを２階にあげるなどの指導を賜った。日頃も消防署の方には防災訓練などの時に来ていただいている。さまざまな活動において地元の地域の方々にご支援いただき大変お世話になった。

本校の職員も多くこのような場に同席させていただくことで、学校教育が地域のみなさまのご協力のもとに成り立っていることを感じるなど、私も職員もこの場でさまざまな勉強をさせていただいた。今後ともよろしくお願いします。本当にありがとうございました。

～　閉　会　～

主な会議資料	・柏陽高校の教育活動について ・柏陽高校の学校目標・学校評価等 ・令和５年度入学者向け「学校案内」
問合せ先	県立柏陽高等学校　副校長　岩崎　幸代 電話番号　045(892)2106